

連載：魂の中小企業

（魂の中小企業）反逆、どん底、再生、そしてATSUSHIとの出会い（立志編）

中島隆 2016年1月26日22時00分



川崎和雅さん、超高級外資系ホテルの51階の部屋の窓から、東京の街がみえる



まずは前回、「死の宣告編」のおさらいから。

東京の南青山にオフィスをかまえる「アルティス」という会社があります。化粧品や美容液、健康食品の企画、開発、そして販売をしています。

その社長、川崎和雅さん（47）は、EXILEのATSUSHIさんと友であり、一緒に「ATSUSHI」を進化させてきた人物です。

かつては、化粧をして学校に行っていたので、ヤンキーたちにボコボコにされます。でも、無抵抗を貫きました。もちろん、化粧をやめません。教師からも、大目玉をくらいます。もちろん、化粧をやめません。

だって、反逆児ですから。

ファッションの専門学校を卒業します。とある洋服店の店員になるのですが、店長がイヤなやつでした。なので、売り上げナンバー1をとってから、やめました。

だって、反逆児ですから。

次の仕事は車屋の社員。社員は必死で働いているのに、社長は湯水のようにカネを使って遊んでいます。ある日の朝礼で、堂々と社長に抗議し、やめました。

だって、反逆児ですから。

自分で車屋を始めます。やくざに脅されるも、堂々と渡り合います、もちろん暴力を使ったわけではありません。

だって、反逆児ですから。

ところが、父親がサラ金でこしらえていた借金を背負うことになってしまいます。

いつまでたっても苦難が終わりません。

〈なんなんだ、ぼくの人生は。死にたい〉

そう思い始めると、体調がどんどんおかしくなります。そして、倒れて病院へ。急性膵炎（すいえん）、すいぞうと胆管の結合症などにかかってしまいます。医師からは「死を覚悟してください」との宣告です。

死んだ後の光景を想像します。

やくざたちが、ざまあみろ、と笑っています。銀行の人たちが笑っています。「カネを貸さなくてよかったよ」

悔しくて仕方がありません。もういちど、知人たちの顔を思い描き、ひとりひとりに、心の中で言いました。

「こんなイヤな思いで死なせてもらって、ありがとう」

最後に自分自身に言ったのです。

「よくここまでがんばった。もう自分を責めなくていいぞ」

では、立志編の始まりです。



死の宣告を受けた川崎のところに、ある友人から電話があった。

「おれさ、肝炎で入院して、もうだめかと思ったんだ。でも、治って退院さ」

悔しくてたまらなかった。

〈なぜ、あいつが完治して、おれは死の宣告なんだ〉

聞くと、その友人、ある健康食品を飲んでいて、おれにも効くかも、と取り寄せて飲みつづけた。

すると……、急におなかがすいてきた。

家に冷えた天ぷらがあった。抜群にうまかった。冷えたコーラを飲んだ。抜群にうまかった。

大きな病院で診察を受けると、劇的に良くなっていた。「完治していました」と川崎。

そして、いまの健康食品の商売をはじめたのである。

じつは、川崎の会社「アルティス」の社員は10人、ほとんどが、この健康食品で体を良くした元お客さんである。ただし、個人差もあるので、記述はここまでにしておく。

さて、生きながらえた川崎は、新天地を目指そうと思った。住宅ローンを組んで買った新築のマンションから移ることにした。

〈さて、どこに引っ越しするかなあ。大好きなものがあるところにしよう〉

そして、引っ越し先に選んだのは……。

おそらく、みなさん知っている地名のところですよ。ここで、クイズです。それはどこでしょう。例によって、少しもったいぶります。読み進めながらお考えください。

妻といっしょに、その土地にある団地の一室に引っ越しした。お金がないので、引っ越しの作業は夫婦ふたりでした。

作業が終わったのは、1999年12月31日、夜11時半すぎだった。30分ほどすると、遠くに花火の音がする。

〈除夜の鐘じゃないなんて、ここらしいなあ〉

ここまでで、川崎さんが引っ越した場所の地名はどこか、分かりましたか？ 分かった方がいらっしゃるようですね。さすがです。

花火を聞いて、川崎は思う。

「きょうから新しい人生が始まるんだ」



ところが、妻がいう。

「引っ越したはいいいけれど、いま50円しかないわ。食費、どうすんの？」

「コメぐらいはあるんじゃないか」

「ないわよ。実家にもらいに行こうかしら。あっ、交通費がないわ」

「ははは、大丈夫、大丈夫」

川崎は、使っていない時計と婚約指輪をもって、近くの質屋に行った。8万円を借りて、家計の大ピンチを乗りきった。

家賃滞納を続け、「もういいから出て行って」と追い出されたこともある。友人に消費者金融でお金を借りてもらったこともある。もちろん、迷惑をかけることなく返した。

一番やっかいだったのは、父親の借金である。8千万円もあった。これはつらい。

家の留守番電話に、取り立ての電話が入る日々だった。弁護士に相談すると、「あなたがかぶる必要はありません」とのこと。そう聞いたときは、ホッとした。

でも、1週間ほどして考えが変わった。30件近くの債権者に、一本一本、電話をかけた。

「おどしの電話を毎日かけていただいておりますが、いまは返済できません。でも、来月から、かならず返し始めます」

「おどしの電話は、やめてください。返す気力がなくなるのです。やめなければ、弁護士に相談して破産も考えます」

おどしの電話が止まった。〈よし、これでやっていけるぞ〉。川崎は10年かけて、利息もふくめて合計1億円以上を返済した。



死の宣告を受けたこともある。やくざに脅されたこともある。どん底、ゼロからのスタートを余儀なくされた。そして、父親の借金の返済……。

きわめて厳しい状況を乗り越えることができたのは、ふたつの支えがあった。

ひとつは、心のヒーローがいたことである。

そのヒーローは、1903年12月に人類初の「有人動力飛行機」を飛ばした男たち、そう、ライト兄弟だ。

飛行実験がもし失敗したら、命があぶない。でも、彼らは、笑って飛行機に乗ったはずだ。その信念が、世界でダントツの輸送手段を生み出すことになった。

〈おれは負けない。笑って挑戦しつづけるんだ〉

もうひとつ、そして、いちばん大きかったのが、「ありがとう」の言葉だった。

川崎が施術を始めたのは1998年ごろ。医師から死の宣告を受けたものの、なんとか復活を果たしたころだ。

いまでこそ、生まれたばかりの赤ちゃんから100歳を超える人も施術している。だが、当時は、年配の人たちが多かった。

ある日、川崎は、年配の女性に、マッサージなどの施術をした。数日たったとき、電話がかかってきた。受話器をとると、電話の主は、その女性だった。

川崎は、不安になった。〈どうしよう、クレームだったら〉

ところが、その女性は、やさしくこう言ってくれた。

「川崎さん、本当にありがとうね。あなたのおかげで、体の痛み、なくなったわ」

川崎は、思った。〈ありがとうっていう言葉、なんて心地いいんだろう〉

それまでの人生を振り返ると、川崎は、心の底から「ありがとう」と言われたことがなかった。

化粧をして学校にいていたときには、ツッパリたちから殴れた。教師らにとっても、じやまな存在でしかなかった。もっとも、反逆児に、ありがとうの言葉はいらない。

自動車販売店につとめていたとき、お客さんから「いい車をありがとう」と言われたことはある。でも、それは、社交辞令だ。

ところが、である。

その女性は、ありがとうを言うために、わざわざ電話をかけてくれたのである。

川崎の心が、ふるえた。

〈ありがとうという言葉って、なんて元気になるんだろう。そうだ、おれは、ありがとうをいっぱいもらおう〉

口コミで紹介された人に、ていねいに施術してきた。無料である。商品の販売は、ぜったい無理強いしないことを貫いた。「ありがとうをもらおう」という精神に反するからである。

ちなみに、お客さんからのクレームは、いっさいない。これが川崎の誇りである。



さて、前回の「死の宣告編」で、ふたつのハテナについて触れました。

ひとつは、なぜ川崎がセレブの御用達になったかです。

もうひとつは、筆者がインタビューに指定された場所が、なぜ外資系の超高級ホテルの51階だったかです。

では、それを解き明かしてまいりましょう。



たくさんの「ありがとう」をもらって、がんばる川崎。けれど、残念に思っていたことがあった。それは、施術を始めるまえに、いつもこう言われるのだ。

「あなたに何ができるの？ 本当に効くの？」

川崎はいつもこう言った。

「終わったとき、かならず、川崎と会えてよかったと言わせてみせます」

この繰り返しだった。どうしたら始めから信じてもらえるだろうか考えた。そして、世界中に影響力のある人に健康食品をつかってもらうことにしたのだ。

だれにしようか、と考えていたとき、テレビをみていたら、当時のローマ法王、ヨハネ・パウロ2世がパーキンソン病になっているとのこと。法王に、うちの健康食品を届けたいと考えた。

強く思うと願いはかなう、不思議なことだけれど。

バチカン市国での5年の留学経験がある男性と知り合った。その人がイタリアに行くときに、食品を託した。

法王に会うのは、至難の業だ。だが、彼は、つてを通じて、法王の主治医に、川崎の食品を届けてくれた。

そして2カ月後、バチカンの国務省から川崎あてに書簡が届いた。

「法王宛てに慈愛あふれるご丁寧なる書簡とともに、お贈りくださいました貴重なる貴殿の真心は、まさに法王の胸をうたれました……」

このことがきっかけで、バチカンやイタリアの要人から、川崎は呼ばれるようになった。

同じような方法で、欧米の政治家たち、日本の芸能人や政治家、経営者たちにも呼ばれ、施術をするようになった。

そして、川崎の施術への疑問の声が消えていった。

ただし、川崎にとっていちばん大切なお客さんは、市井のお客さんたちである。

「『人』を『良』くすると書いて『食』。食品で世界をシェアにしたいんです」

川崎は、本当にそうしたいと考えている。尊敬するライト兄弟だって、はじめは皆から、そんなことできるの？、と言われていたはずだから。



さて、もうひとつの謎を解き明かそう。なぜ、わたしが、超高級な外資系ホテルの51階に呼ばれたか、である。

すべてのきっかけは、2011年3月11日、東日本大震災だった。

あの震災で、川崎の住む街は、たいへんなことになった。土地がうねり、地面から水があふれる。駅前では、タクシーがひっくりかえっている。水道がとまり、市民はみな、給水車が来るのを待った。そう、液状化現象だ。

そして、東京の街から、明かりが消えた。

そのころ川崎は、東京都内のとあるホテルの一室を借り切り、そこで有名人の施術をしていた。もちろん、セレブたちのプライバシーを守るためだ。

川崎は、たまたま、超高級外資ホテルに寄った。そのホテルの客室に、明かりはなかった。それを見て思った。

〈このホテルがこれでは……。東京が終わる〉

川崎は、ホテルの担当者に話した。

「来週から、部屋を借りっぱなしにさせてください。ホテルに明かりを取り戻しましょう」

驚く担当者。そして3日後、返事がきた。

「いま借りていらっしゃるホテルに状況をおたずねしました。あまりにも評判がいいので、どうぞ好きな部屋をおつかいください」

そして、借りたのが51階の部屋だった。だから、私はそこに呼ばれ、インタビューをしたのである。

1日あたり数人、この部屋で施術を受けている。



ところで、川崎さんが人生の再スタートに選んだ土地、どこだかお分かりになりましたか。

これまでに描いてきたヒントは、ふたつあります。

ひとつは、大みそか、除夜の鐘ではなくて、カウントダウンの花火があがる、ということです。

もうひとつは、その土地では東日本大震災で液状化現象がおきた、というくだりです。

そうです、東京ディズニーランドがある千葉県浦安市でした。

川崎さんは毎年、ディズニーランドであがるカウントダウンの花火を、浦安市内の公園から眺めます。

そして、思うのです。

〈この瞬間、おれの新たなスタートがはじまった！〉

さて、大みそかのカウントダウン花火を見る川崎さんですが、その前に、かならずする仕事があります。それが毎年の仕事納めです。時間は、夕方、つまり紅白歌合戦がはじまる直前です。

それは……。EXILEのATSUSHIさんに施術をして、紅白のステージに送り出すことなのです。

次回、友情編！（敬称略、つづく）



中島隆（なかじま・たかし） 朝日新聞の中小企業担当編集委員。福岡生まれの千葉育ち。自称、中小企業の応援団長。著書に「魂の中小企業」（朝日新聞出版）、「女性社員にまかせたら、ヒット商品できちゃった」（あさ出版）。就活生向けの朝日学情ナビでコラム「輝く中小企業を探して」を連載中。朝日新聞朝刊で月1回特集している「われら中小企業」のまとめ役。（中島隆）

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.